

海外だより

## アジア障害者体育・スポーツ学会 (ASAPE) の組織と活動

活水女子大学 柿山哲治

### 1. ASAPE とは

アジア障害者体育・スポーツ学会 (Asian Society for Adapted Physical Education and Exercise: ASAPE) は、アジア地域の障害者・高齢者の体育スポーツに関する科学的な研究の進歩と発展を図る目的で、1986年に設立された。初代の会長には名古屋大学矢部京之助教授 (現:大阪体育大学) が就任し、第1回研究発表大会は1989年に名古屋で開催された。以後、表1に示すように、1993年を除いて2年ごとに (原則として偶数年度に)、研究発表大会を開催している。現在は、台湾師範大学 Lin Man-Whay 教授が会長を、また、筑波大学中田英雄教授 (ASAPE 日本支部会・会長) が副会長を務めており、2004年には、インドネシアのバリ島で第8回大会が開催された (写真1)。

### 2. ASAPE の活動

ASAPE の活動は、2年ごとの定期的な研究発表大会の開催を機軸にしながら、会員の情報交換のための「ASAPE NEWSLETTER (英文)」を発行している。現在19号までが刊行されており、加えて会員以外にも開かれたホームページ ([http://blog.livedoor.jp/adapted\\_pa/](http://blog.livedoor.jp/adapted_pa/)) を開設している。また、会員は自国内における障害者・体育スポーツの研究推進にも努めており、韓国、台湾、インドネシアでは障害者・高齢者体育・スポーツに関する研究団体を組織している。

日本においても、日本の会員を中心に年に1回「ASAPE 日本支部会」の名称で研究発表大会を開催

している。これまで開催した日本支部の開催年度と大会事務局を表2に示した。なお、1999年から2005年までの大会は、「医療体育研究会」と「ASAPE 支部会」との合同大会というかたちで開催している。

表2 ASAPE 日本支部会 (開催年度と大会事務局)

第1回	1996	筑波大学
第2回	1997	広島大学
第3回	1999	小田原循環器病院
第4回	2000	埼玉県総合リハビリテーションセンター
第5回	2001	放送大学
第6回	2002	日本福祉大学
第7回	2003	国立身体障害者リハビリテーションセンター
第8回	2004	北海道教育大学岩見沢校
第9回	2005	東北文化学園大学



写真1. ASAPE 第8回大会の様子

(上: 5カ国 (香港, 日本, インドネシア, 韓国, 台湾) 代表者によるパネルディスカッション, 下: 聴覚障害児によるバリの伝統舞踊)

表1 ASAPE 大会の開催年度と大会事務局

第1回	1989	名古屋大学	名古屋
第2回	1991	宮崎大学	宮崎
第3回	1994	台湾文化大学	台北
第4回	1996	梨花女子大学	ソウル
第5回	1998	筑波大学	つくば
第6回	2000	台湾師範大学	台北
第7回	2002	香港バプティスト大学	香港
第8回	2004	インドネシア教育大学	バンドン
第9回	2006	活水女子大学	長崎

また、日本支部会は2003年度より、研究機関誌「障害者スポーツ科学」を発行している。言語は日本語または英語とされているが、将来的にはこの雑誌を英文のみに統一し ASAPE の Journal として発行したいと考えている。現段階では雑誌発行を前提とした会費の一律的な値上げは、アジア諸国の経済状況を考えると困難だと判断し、当面日本支部会会員のみで特別会費を設定して発行をしている。もちろん論文の投稿者に関しては、ASAPE 会員はもちろん、アジア以外の研究者にも門戸を開いている（写真2）。



写真2. ASAPE 日本支部会研究機関誌「障害者スポーツ科学」

### 3. 障害者ヘルスフィットネス国際会議 (ISAPA) との関係

障害者体育・スポーツに関する世界規模の研究団体としては、国際障害者ヘルスフィットネス連盟 (International Federation of Adapted Physical Activity: IFAPA) がある。IFAPA は北米、南米、ヨーロッパ、アフリカ、オセアニア、アジアの支部をもつ連盟として構成されている。ASAPE は1996年に IFAPA に加盟し、アジア地区からは2名の理事が選出され、IFAPA の運営にあたっている。IFAPA が開催する研究発表大会 (International Symposium on Adapted Physical Activity: ISAPA) は表3に示すように2年に1回 (奇数年) 開催されている。ASAPE が1993年に大会事務局となって横浜で開いた第9回 ISAPA は、アジアの会員が障害者体育・スポーツの研究の世界的動向を目の当たりにする機会となったが、同時に、アジア地区の研究の相互連携を大きく発展させる契機となった。これ以降、ASAPE は ISAPA と正式な連携関係を結んでおり、2003年には再びアジア (韓国・ソウル) で第14回 ISAPA が開催された。

表3 ISAPA の開催年度と開催地

第1回	1977	ケベック	カナダ
第2回	1979	ブリュッセル	ベルギー
第3回	1981	ニューオリンズ	アメリカ
第4回	1983	ロンドン	イギリス
第5回	1985	トロント	カナダ
第6回	1987	ブリスベン	オーストラリア
第7回	1989	ベルリン	西ドイツ
第8回	1991	マイアミ	アメリカ
第9回	1993	横浜	日本
第10回	1995	オスロ	ノルウェー
第11回	1997	ケベック	カナダ
第12回	1999	バルセロナ	スペイン
第13回	2001	ウィーン	オーストリア
第14回	2003	ソウル	韓国
第15回	2005	ベローナ	イタリア

### 4. 今後の展望

ASAPE は、1986年に設立し、2006年で創設20周年を迎える。その節目となる第9回 ASAPE 大会は、大会テーマを「アダプテッドスポーツの社会的貢献」として、2006年8月1日～3日に活水女子大学 (長崎市) で開催される (大会ホームページ: <http://www.kwassui.ac.jp/~asape2006>)。ASAPE の目的は、障害者や高齢者の体育・スポーツに関する研究の発展と支援、さらには、これらの研究の意義と重要性を広く世の中の人たちに理解してもらうことを目的としている。しかし、アダプテッドスポーツの研究は未熟な段階にあり、成人の域に達するにはほど遠い状況にある。すなわち、アダプテッドスポーツの理論と実践には大きな隔りがある。また、アダプテッドスポーツを実践する際には、障害者や高齢者に対する社会 (健常者) の理解が不可欠であるが、欧米に比べてわが国やアジア諸国は遅れている。一口にアジアといってもそれぞれの国の状況は異なっており、欧米とは異なる文化的、社会的背景がある。ASAPE は、アジアの国々の特色と多様性を尊重し、①アジアの国々における研究の活性化、②研究者間の交流促進、③アジアの国々へ研究情報を発信する役割、を担っている。そのためには、ASAPE における今後の活動が、理論追及の場であるとともに実践活動に役立つエビデンスを提供する場となることが期待される。

大学めぐり

## 長 崎 県 立 大 学

長崎県立大学 西村千尋

### 1. 長崎県立大学の沿革

長崎県立大学は、1951（昭和26）年創設の長崎県立佐世保商科短期大学を前身とし、その後1957（昭和32）年に長崎県立女子短期大学と統合、長崎県立短期大学佐世保商英部と改称、続く1967（昭和42）年には長崎県立国際経済大学に昇格、開設された。大学開設とともに経済学部経済学科（定員 200名）を設置し、さらに1991（平成3）年に大学名を長崎県立大学に改めた。それと同時に流通学科（定員 230名）を増設し、経済学科の定員増（定員 230名）を行った。本年2005（平成17）年には、長崎県公立大学法人長崎県立大学へ改組（法人化）と同時に、地域政策学科を新設（定員 150名）、流通学科を流通・経営学科に改編（定員 150名）し、経済学科（定員 150名）と併せて一学部三学科（定員 450名）体制となった。なお、2005年3月には新体育館（S+RC造2F 延床面積 2242m<sup>2</sup>）が完成し、2005年度の授業より使用を開始している。



### 2. 健康・スポーツ関連授業科目

#### (1) 体育科目

2002（平成14）年度のコース制および Semester 制の導入に伴い、2001（平成13）年度までの実施されていた保健体育科目の見直しが行われた。2001（平成13）年度までの保健体育科目は、講義2単位（体育講義・保健理論）と実技2単位から成り、いずれも必修科目で、実技は毎週2時間30週で1単位と設定していた。これを2002（平成14）年度からは保健体育科目を体育

科目に改称し、講義については健康科学理論として教養科目へ移し、実技の必修2単位については2001（平成13）年度までと同様であるが、科目名を「体育実技」から「生涯スポーツ」に改めるとともに、毎週2時間30週で1単位を15週で1単位と変更した。さらに、独立法人化とともに行われた改革では、「生涯スポーツ」という科目名と毎週2時間15週1単位はかわらないものの、必修1単位、選択4単位と変更し、2005（平成17）年度から実施している。

#### (2) 教養科目

先述したように、2002（平成14）年から「健康科学理論」を教養科目に配置している。その後、独立法人化の際の改革に伴い、「健康科学」に科目名が変更されている。

#### (3) 専門科目

地域政策学科の地域・人間環境コースに「地域社会とスポーツ」を、地域づくり・地域経営コースに「健康政策論Ⅰ・Ⅱ」を設置している。また、「環境政策論Ⅰ・Ⅱ」においても、Lifestyles of Health and Sustainability (LOHAS) の観点から有機的連携を目指し、関連分野としてその一部を担当することが計画されている。いずれも3年次配当で、2007（平成19）年度に開講予定である。さらに、これらを基礎とした専門演習の担当も予定されている。

### 3. 授業内容および目標

必修単位である「生涯スポーツ1」は1年次前期に配当され、フィットネスとして実施されている。目標を「フィットネスを理解、実践してもらい、生涯にわたり健康の保持増進に有用な能力をはかる」（長崎県立大学 平成17年度 SYLLABUS 《1年生用》）と設定し、ウォーキング、ジョギング、サーキットトレーニング、ウェイトトレーニングに、身体活動の効果に関する講義を加え実施している。

選択で設定されている「生涯スポーツ2」は1～4年次の後期に配当され、必修1単位を修得した学生に限り履修を認めている。この科目では「スポーツ種目を通じて、スポーツの理論と技術を習得し、学生生活



および生涯にわたっての自己のライフステージや心身の状態に適したスポーツを生活の中に取り入れ豊かなライフスタイルを形成し、楽しさや、喜びを味わえるようにしたい」(長崎県立大学 平成17年度 SYLLABUS《2年生以上用》)と目標を設定しており、現在、定時コースではテニス、ソフトボール、サッカー、卓球、ソフトバレーボール、インディアカ、バスケットボール、バドミントンを、集中コースではスキー、ゴルフ、マリン(シーカヤック)を設けている。なお、集中コースのスキーは現在不開講となっている。

#### 4. 特色ある取り組み

本学の立地を活かした授業として、本誌第2巻第1号では「ウォーキング」を、第4巻第1号では「マリン(シーカヤック)」を報告している。このうち後者については、地域の特性を活かした授業として位置づ

けており、その授業効果を基礎に地域づくりに貢献するまでに至っている。具体的には、国立公園指定50周年を迎えた西海国立公園に属する九十九島をフィールドに、シーカヤックの技術の習得・向上だけでなく、自己開示・他者理解を目的としたシェアリングを用いたコミュニケーション構築、環境問題など、その教育効果を基礎データとして含んだ「九十九島学」を設け、大学内だけでなく地域子ども達をはじめとした市民にもプログラムを提供するに至っている。今後は、地域との連携を強化しながら、シーカヤックの技術認定制度を取り入れることも視野に入れている。

また、地域のイベントを活かした健康づくりとして、よさこいさせば祭りへの取り組みを対象に検討を始める予定である。

#### 5. 今後の課題

2001(平成13)年度までは毎週2時間30週で1単位と設定していたため、定時コースを履修する学生は半期で1種目、2年間で4種目を選択していた。具体的には、ボールゲーム群、ラケットスポーツ群、ニュースポーツ群から少なくとも1種目を選択する条件を設定し、多様な種目との出会いと体験の機会を提供していた。その後、2002(平成14)年度には異なる2群からそれぞれ1種目を選択することと設定していたが、2005(平成17)年度の改革ではこの条件も撤廃された。

このように、かなり短期間のうちに2度にわたるカリキュラム改革が進められたこともあり、2005(平成17)年度から実施されたカリキュラムがどのような改善点を有するか見極めながら取り組んでいく必要がある。特に、専任教員2名が専門科目を担当することにより、非常勤講師への依存度が高くなることが考えられる。また、2008(平成20)年に予定されている県立長崎シーボルト大学との統合による影響がどのように及ぶか予測のつかない点もあり、今後は慎重な検討が必要となってくるであろう。

## 「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」春期研修会の概要

1. 開催期日：平成17年3月16日（水）～17日（木）
2. 会場：公立学校共済組合熊本宿泊所「水前寺共催会館」
3. 研修内容：
  - (1) 特別講演  
「我が国における人口構造の変化——『少子高齢化問題』を中心に——」  
隅倉 直寿（九州東海大学応用情報学部）
  - (2) 特別講義：魅力ある授業づくり  
「授業づくりの方法と原理」  
鈴木 理（宮崎大学）
  - (3) シンポジウム：地域貢献の方法と課題  
「熊本大学における地域貢献とその課題」  
川崎 順一郎（熊本大学名誉教授）  
中川 保敬（熊本大学）  
高木 誠司（NPO スポーツ福祉くまもと理事）  
井口 佳久（NPO スポーツ福祉くまもと理事）
  - (4) 一般研究発表
    - 1) 我が国の大学改革と東海大学の新しい取り組み  
米沢 久（九州東海大学）
    - 2) 大学で学ぶテニスの技と文化の授業  
中島 憲子（中村学園短期大学）
    - 3) 「生活の体育化」の実践に向けて——体育手段に着目して——  
飯干 明（鹿児島大学）
    - 4) 「健康・スポーツ科学講義」で運動行動が促進できるか——行動変容技法の指導の効果——  
橋本 公雄（九州大学）

## 九州地区大学体育連合春期研修会に参加して

鹿児島大学 末吉靖宏

昨年は、鹿児島での春期研修会担当理事として「研修会を終えて」の報告を担当したが、今年は、「研修会に参加して」の執筆依頼を受けた。諸事情によるもので、研修会終了後、しばらくしてから要請であったため、多少、記憶があいまいではあるが、価値あるご講演をいただいた講師の先生方への感謝の意味を込めて、この文を書かせていただきたい。

一般研究は、4題の発表がなされた。

「我が国の大学改革と東海大学の新しい取り組み」と題した米沢久先生（九州東海大学）のご発表では、まず、少子化、大学教育の国際格差等、大学改革が必要になった背景をまとめられた。次に、全国の大学での改革例が示され、さらに、東海大学での教育改革、最後に、大学体育の改革のヒントという構成であった。いずれもポイントをまとめた資料を準備いただき、今後の各大学での改革の取り組みのヒントとして使えるのではないかと思った。

「大学で学ぶテニスの技と文化の授業」と題した中島憲子先生（中村学園大学）のご発表は、テニスを題材とした実技の授業で、技術練習以外にテニスの歴史、ルール、マナーなどを講義や学生の調べ学習を通じて理解させる授業の紹介であった。学生のレポートの紹介もあり、その中では肯定的な反応を読み取ることができた。学習内容もさることながら、調べ学習やレポート作成など、技術練習以外の部分でも学生の能動的な取り組みを促すことにより、学生の授業満足度を高めている点が参考になった。

「『生活の体育化』の実践に向けて——体育手段に着目して——」と題した飯干明先生（鹿児島大学）、および「『健康・スポーツ科学講義』で運動行動が促進できるか——行動変容技法の指導の効果——」と題した橋本公雄先生（九州大学）のお二人のご発表は、講義によって、受講生の体育・健康生活の変容を図る試みについてのものであった。飯干先生のご発表では、行動変容の内容で受講生の対応に違いがあり、一般的に栄養、休養よりも身体活動に対して学生は積極的であり、所属学部によっても差異があることが報告された。橋本先生のご発表では、「行動変容技法」を講義

に取り入れて、一定の成果が得られたことが報告された。お二人のご発表を通じて、これからは、ただ授業を行うだけでなく、自ら授業の有用性の評価を行い、授業価値を高めていくことの重要性が示されたように感じた。

特別講義は、宮崎大学の鈴木理先生を講師とする「授業づくりの方法と原理」というものであった。この講義では、「学校教育の役割」、「体育の役割」といった授業を考える上での基本的な話から始まり、実際の体育授業での授業調査の結果も踏まえて、授業という営みの合理的な捉え方を示していただいたように思う。この講義からは、実際の授業、およびそのシラバスにおいて、受講者への Accountability（説明責任）が意識されねばならないことを痛感させられた。

特別講演は、九州東海大学の隅倉直寿先生を講師に、「我が国における人口構造の変化—『少子高齢化問題』を中心に—」というテーマであった。実は、筆者自身が最近の講義では、そのはじめに少子高齢化の現状について触れ、将来の生活に備えた健康認識を持つことへのモチベーションづくりに利用している。それだけに本講演テーマには関心があった。重要ではあるが硬くなりがちなテーマについて、ユーモアを交えてご講演いただいた。お陰で、内容もよく理解できたように思う。

情報交換会は、担当理事である熊本学園大学、加藤先生の司会のもと和やかに開かれた。この会には、発表者、講演者もご同席いただけるので、昼間の講演で関心や疑問を持ったこともフランクにお話できるというメリットがある。私も、特別講演の隅倉先生、特別講義の鈴木先生と直接お話をさせていただき、講演の内容の理解をより深めることができた。また、席上、九州大学が全国体育連合より2部門にわたって、賞を得られたことが報告され、満場の喝采を浴びた。また、九州地区以外からの参加者が今年もあり、会の最後に自己紹介をいただいた。九州地区体育連合への他地区の関心の高さを示す一齣であった。

2日目のシンポジウムは、「地域貢献の方法と課題」のテーマのもと、「熊本大学における地域貢献とその

課題」というタイトルで、熊本大学で行われているNPO法人の活動について現状報告が行われた。まず、熊本大学の大学としての地域貢献の具体的な事業の一環として総合型地域スポーツクラブ支援が行われ、事業推進の母体として「NPO法人スポーツ福祉くまもと」が設立された経緯が紹介された。400万円の支援で始まった事業が、現在4000万円の事業収入を得るまでに成長してきたこと、その収入の多くが「健康づくり教室」や「転倒予防教室」をはじめとする県、市町村など行政からの委託事業であることなど、興味ある話題が紹介された。同時に、NPO法人立ち上げ時の大変さや、民間会社との競合の問題等、苦労話も率直にお話しいただき、参加者の多くにとって有益な話題

であったと思う。昨年も書いたことであるが、この研修会が、本シンポジウムのような、画一的でない、各大学の事情に合わせた個性的な取り組みの情報交換の場になれば、会員の関心も更に高まり、参加者増につながっていくのではないだろうか。

今年は、開催地熊本県の先生方の結束の強さもあり、参加者数が60名を超え、例年にも増して熱心な研修会になったように感じられた。また、文中にも記したが、九州以外の他地区からの参加者も年々増えており、この会の存在感も増していくことが予感された。本研修会の開催にご尽力くださった方々に感謝しつつ、会の更なる発展を祈念して本稿を閉じたいと思う。

## 春期研修会を終えて

熊本学園大学 加藤 健 一

平成16年度全国体育連合九州支部研修会と九州地区大学体育連合春期研修会を合同の共催事業として熊本県で開催することに決定したのは、平成16年3月の桜島で開催された総会のときでした。熊本県の理事として参加していた私は、「熊本でお引き受けします。会長から50人以上参加する大会にしてほしいとの要望がありました。研修会の内容が、今年のように充実したものを理事会が企画すれば、皆さんが参加してくれると確信していますのでお任せください。来年、熊本でお待ちしています。」と、大見得を切って承諾の挨拶をしたことを今でも思い出します。

熊本に帰り、加盟各大学の代表者に報告しますと、特別講演、シンポジウムの企画内容案が1、2ヶ月のうちにまとまりました。この団結力は、平成15年に熊本大学が主管として開催しました日本体育学会の県内協力体制が県内に残っていたことと、熊本地区大学保健体育担当者懇談会を毎年開催して、各大学間の情報交換と教員同士の親睦を日頃から深めていることがその理由だろうと、個人的に解釈いたしました。

会場は、熊本県立大学が地方公務員共済施設に利用申し込みをすることで、格安で確保でき、九州東海大学が「特別講演」の推薦を引き受け、熊本大学が研修会の一つのテーマである「大学の地域貢献」について

発表する。受付等は尚綱大学、平成音楽大学。参加者確保は崇城大学。発表用機器は、熊本大学と熊本学園大学。研修会参加者のドリンク剤確保の交渉を熊本学園大学。このように県内大学の方々がすばらしいチームワークを発揮され協力していただきました。また、この間、事務局の古村理事からも色々サポートとアドバイスをいただき、難なく準備が整い担当者として安堵するとともに、協力していただいた皆さんに心から感謝とお礼を申し上げます。

この研修会は、長年「魅力ある授業づくり」と「大学の地域貢献」の二つのテーマを掲げていますが、研修会の内容については、いかがなものでしたでしょうか。参加者には、関東・関西支部などからの参加者も含め総参加者62名でした。夜の研修会にも多数の方々が参加され、会員間の親睦と情報交換の目的が十分達せられ終了したと思っています。

さて、最後になりましたが、これまで全国大学体育連合だけに加入し、九州地区大学体育連合に未加入の大学にはこの研修会の通知などの案内をしていませんでしたが、共催事業であるという認識により、事務局了承のうえ今年から文書で通知することにいたしましたので、会員加盟校の皆さん承知おきくださるようお願いして、春期研修会の報告といたします。